

# 〈オンライン対談〉 生きるモデルがない今 「社会正義」を いかに教育現場につなげるか

学校の社会的・福祉的価値が改めて見直されている今、そのような生徒たちへの支援をしていくうえで、大切なことは何でしょうか。キャリア教育をテーマに研究を続けてきた下村氏と、困難校の進路指導に取り組んだ経験をもつ荻間澤先生にオンラインで対談していただきました。

人の力を借りながら  
一人ひとりがモデルを作る

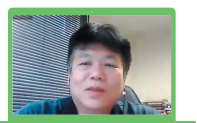
**下村** 新型コロナ発生からの社会におけるさまざまな出来事は、誰も経験したことがないような大事件。このシヨックをうまく乗り越えていくことが一つの課題です。特に社会情勢が厳しくなると、格差が開きます。より一層「社会正義」の視点からキャリア支援をしないといけない生徒たちが生じると思います。

**荻間澤** そうですね。新型コロナウィルスの影響で社会が激しく変化し、前ページの寄稿文でVUCA時代とお書きになったように先は見えず、解は誰ももっていません。そういう意味では東日本大震災のときと同じ状況で、生きるモデルがないのです。あのとき、生徒たち自身が、人の力を借りながら、自分たちでモデルを作っていました。まさに今、生徒も、先生も、自分たちでモデルを作っていくときなのでしょう。

**下村** その点、SDGsと似ているところがあります。二つの課題、例えば貧困、学力格差、発達障害、LGBTなど、今、学校内で起きているさまざまなトピックを束ねて「社会正義」という言葉でくくることで、校内で一人も取り残さない、という大

## 「誰一人取りこぼさない」を 大きな動きに

—下村英雄—



Shimomura Hideo

きな動きになるのではないかと考えています。

**荻間澤** 私が教師を志した根っこにあるのが、「誰もがキャリアを通して、自分が望むような生活、人生を過ごせる。そのキャリアをつくるために学校に通う。それを支援できる教師ってすごい」という思いなんです。だから、誰も取りこぼさないという「社会正義」という考え方が、とてもしっくりきました。

### 深いカウンセリング姿勢から スタート

**下村** ところが、皮肉にもというか、当たり前というか、大多数を対象とするキャリア教育を推し進めていくと、少数派は捨て置かれていく危険性が強まります。

**荻間澤** 学校適応を高めようとする際も、クラス全体に働きかけて多くの生徒が適応できるなかで、一人ぽつとうまくいかない生徒が気になるようになります。そこで、教員の意識が重要です。「あの子は特別だから仕方ない」と切り捨ててしまう感覚は当然良

しとされません。外れている生徒をいかに援助できるかが問われています。先生がしっかり支援できるからこそ、すべての生徒がそれぞれの一步を踏み出していけるのです。

**下村** そうですね。マスの標準的な生徒に向けた指導の一方、個別の進路相談が非常に重要になります。寄り添う、話を深く聴く。「社会正義のキャリア支援」を実践する3本柱の一つ、深いキャリアカウンセリングが重要になってくるわけです。

**荻間澤** 先の東日本大震災のときも、生徒たちにしつかり寄り添うことがスタートでした。カウンセリング的な対応から始まって、しつかり寄り添い、伴走者的に生徒を見ていくことが大事だと思っています。

### 働く姿が生徒の身近になった！?

**下村** ただ、実は私は、コロナ禍は悪いことばかりじゃなかったと思っているんです。リモートワークなど次世代の働き方が進みました。生徒たちは、オンライン授業を体験したり、いろいろ

なことを試している。大変だと思っ  
ているのはむしろ大人の方で、意外に子  
どもたちは楽しんでる部分もあるの  
ではと感じます。しかも、在宅勤務  
などにより、扉一枚隔てて仕事の世界  
があるのは、子どもたちにとって新鮮  
なことです。これまで見えなかった「働  
く」が可視化され、こんなこともリア  
リティを伴ったキャリア教育の二つのきつ  
かけになるのではないのでしょうか。

**荻間澤** 体験したことをプラスにして  
いく力を人はもっていますからね。私  
が期待しているのは、家にいる時間が  
増えて家族の会話も増え、お互いの関  
係性を築く機会にしてみらえるとい  
いなど。そこが人への信頼感や自分を考  
えることが大事だと思ふスタート地点  
になることが多いと感じています。

**下村** コロナ禍による社会の変化は、  
むしろ大人の問題で、我々がどれだけ  
適応していけるかにかかっているのかも  
しれません。

**学校を開く。社会とつなぐ**

**下村** 同じ境遇にありながら、ある

人はしっかり働いているのに、この人は  
だらしがないということがあります。そ  
のとき、何が二人を分けるかという  
やはり大きいのは本人の意識や意欲で  
す。キャリア教育やキャリア支援はそ  
こに働きかけていきます。それに対し  
て、自己責任問題や精神論に落とし  
込んでいくという批判を受けます。し  
かし、社会的な問題や制度、環境に  
も目配りするという「社会正義のキャ  
リア支援」実践の3本柱の一つで  
ある「アドボカシー」、本人が進路を切  
り拓いていく手段を増やしていく「エ  
ンパワーメント」という働きかけが、「社  
会正義」では重要なことです。個人的  
な支援と、社会的制度面からの支援  
と、両方が行われないと、「社会正義」  
はうまくいかないというのは強調した  
いところですね。

**荻間澤** それは、「学校を開いて社会  
につなぐ」ということではないでしょ  
うか。小さなことでは、私は生徒をハ  
ークワークやジョブカフェに連れてい  
っていました。将来助けてと言え  
る場所だよ。ただ、そういう取組をする

にあたって、組織全体を俯瞰して捉え  
てもらえるリーダーや管理職の存在も  
重要です。現場の先生二人が奮闘する  
だけでは生徒たちを支えきれないし、  
管理職からのトップダウンだけでも組  
織は機能しない。私はそれをハンバ  
ー構造と言ったのですが、上下にし  
っかりバンスがあつて、それで中身を挟  
まないと美味しくならないのです。

**問われる先生自身の  
「教育観」と「熱量」**

それぞれが持っているキャリア教育観や進  
路指導観に働きかけるアプローチだ  
と  
思っています。「生徒にどうなつてほ  
しいのか」という先生方の思いを議論す  
るための問題提起の枠組みだとお伝え  
したいですね。

**下村** 「社会正義」というのは、それ  
ぞれが持っているキャリア教育観や進  
路指導観に働きかけるアプローチだ  
と  
思っています。「生徒にどうなつてほ  
しいのか」という先生方の思いを議論す  
るための問題提起の枠組みだとお伝え  
したいですね。

**荻間澤** 以前、ある困難校に赴任し  
た際、卒業時に進路未決定の生徒が  
10%以上もいることに困惑し、絶対3  
年後にはすべての生徒が進路先を決め  
て卒業してほしいと思いました。ただ、  
そのために学校や教師に何ができるだ  
ろうと悩みました。そもそも生活習  
慣ができていない生徒たちが多く、顔  
も洗わず、歯も磨かず、ご飯も食べな  
いで遅刻してくる。感情面でも、す  
ぐふてくされたり、ネガティブだつた  
り。入学した生徒たちの多くはマイナ

**「あの子は特別だから」と  
切り捨てない**

— 荻間澤勇人 —



Karimazawa Hayato

**編集部より**

マイノリティへの支援で議論が広がってきた「社会正義のキャリア支援」。「普通の生徒だけがいる」学校は存在せず、課題を抱える生徒に向き合えない高校などないでしょう。「普通」とくらわれる生徒も「マイノリティ」感を抱えているかもしれません。彼らに先生方や学校はどのようなことができるでしょうか。誰もが先を見通せず不安を抱える今、多様な価値観を統合して乗り越えていくことが必要という気がしてなりません。一人も取り残さない「学び」や「キャリア教育」の在り方を、これからも考え続けたいと思います。



スからのスタートで、ライフスキルの定着を目指すには、ひたすら彼らを理解し寄り添う必要があります。その取組が積み重なって、3年後、全員進路が決まった状態で生徒を送り出すことができそうです。「社会正義」をどうやるかと大上段に構えるのではなく、やはり、先生一人ひとりの「熱量」が大事なんだと思います。そこは、今も昔も教師であり、キャリア支援者として重要なことなのかなと思います。